

使い捨てプラスチックと子どもの教育について

——子ども修養道場での実践結果報告——

中井 本 蓉

一、はじめに

本発表に至るまでの事の発端は、昨年度末に発せられた現宗研所長の一言でした。曰く、「いま海洋プラスチック問題が国際的に関心を集めています。このような環境問題に取り組む者が我が研究所に一人くらいいてもよいのではないか」と。この発言を受けて筆者は、今年度の研究・調査分担を決める会議に於いて「現宗研で研究すべきだと考えるもの」として、「プラスチック製品をめぐる環境問題について」という課題を提案し、早速調査にかかり研究員例会にて発表するようにとの指示をいただきました。環境問題について無論興味を持ってはいましたが、なにより他に適当な課題を思いつかなかったこともあり、実を言えば当時はいわゆる忖度として提案したに過ぎませんでした。しかし結果として、非常に有意義な経験をすることができました。本発表はその報告です。きっかけをくださった三原所長にはこの場を借りて、日頃のご指導に対する感謝の意を表します。

二、マイロ・クレスの衝撃

さて、研究員例会にて筆者が報告した調査結果は省略させていただき、ここでは海洋プラスチック問題の中でも、

マイクロプラスチックに関して筆者が個人的に押さえておくべきと考える情報を簡条書きにて紹介いたします。

- ① マイクロプラスチックとは、微細なプラスチックごみ（直径五ミリ以下）のことである。はじめから小さいものと、大きなプラスチックゴミが劣化して微細化したものがある。
- ② 一度海中（あるいは土中）に放出されると回収はまず不可能である。
- ③ 化学物質を吸着しやすく、その上将来的には食物連鎖によって人間の体内に大量に摂取される可能性がある。
- ④ 海洋に投げ出された一本のペットボトルがマイクロプラスチックとなり、完全に分解されるまで、四五〇年かかるという研究結果がある。
- ⑤ 二〇五〇年までに海に捨てられるプラスチックごみの総重量は、海に生息する魚の総重量を超えると予想されている。

以上のことをふまえただけでも、我々が日頃プラスチック製品を気軽に使い捨てしていることに疑問を抱かずにはいられません。プラスチックは日常的に使い捨てするにはあまりに丈夫なのです。また、それらのごみが意図せずして（故意の場合もありますが）海に投げ出されてしまった場合のその行く末を考えると、ゾツとするものがあります。そして海洋プラスチックごみについて調べていくうち、筆者はついに運命的な出会いをしました。「あまりにも気軽にプラスチック製品を使い捨てすることは、環境破壊につながるのではないか？」という疑問を、今から八年も前に自ら抱いた少年がアメリカにいたのです。名前はマイロ・クレス。彼は二〇一一年当時九歳にして、環境問題に興味を持ち、ストロー製造業者に自ら電話をかけて聞き取り調査するという独自の調査によって、「アメリカ合衆国では一日に約五億本の使い捨てプラスチックストローが使われている」という統計数字を得ました。そして近隣のレストラ

ンなどに、客から要求されて初めてストローを提供するよう呼びかけました。この働きかけは「Be Straw Free（ストローなしでいよう）」運動として全米に広まり、多くの為政者や著名人の賛同するところとなりました。日本ではあまり知られていないのが非常に残念に思われます。このマイロ君がバーモント州知事と対談したときに語った彼の理念に、筆者は衝撃を受けました。

“This planet is not a place that kids will inherit at some point, far off in the distant future. We live here right now, and share this planet already, which is why it’s so important that we take individual and collective responsibility for its well being.”

「この惑星は、遠い将来、子供たちがどこかの時点で受け継ぐ場所ではありません。私たちは今ここに住んでいて、すでにこの惑星を共有しています。ですから、私たちがその幸福のために個人的および集団的責任を取ることが非常に重要なのです」（筆者和訳）

この文章を読んだとき、筆者は思わず「子どもなのにすごい」と思いました。それと同時に、「大人が言わせているのではないか？」とも思いました。それくらいこの提言は反論の余地がなく、しかもハッとさせられるものでした。マイロ君の環境問題に対する強い当事者意識を感じます。「子どもだから」という制限を設けず、いまこの瞬間地球上に暮らすすべての人類を「惑星の共有者」とするこの考え方はすべての人が認識すべきものです。さらにこの提言の優れている点は、彼が大人になってから全く同じことを言っても、その説得力は失われないということです。大人が言っても取り合ってもらえないような綺麗事を子どもが言うから聞いてもらえる、という類の言葉ではないので

す。筆者はこのマイロ君の運動と理念を、ぜひとも日本の子どもたちに伝えたいと感じました。

三、問題発生

例会の発表資料を作成している時点で、筆者はこのマイロ君のことを自分が所属する栃木県日蓮宗青年会で毎年開催している「子ども修養道場」で法話させてもらおうと決めていました。そしてこの化学研究発表大会で結果報告させてもらおう、そこまでやって初めてこの研究発表は完成するのだ、とも思っていました。また法話だけでなく、一泊二日の道場中にするプラスチックごみの削減にも取り組みたいと考えていました。

ところが実際に行動に移してみると、そう単純に物事は運ばないことがすぐにわかりました。まず例会発表後に設けられていた青年会の会議で前述のようなことをさせてもらいたいと勢いよく進言したところ、快く受け入れてはもらえたのですが、話し合いが進むにつれて、どうも筆者のやりたい法話の内容が、今年度の子ども修養道場の全体の流れに即していないということがわかってきたのです。というのも、今回の子ども修養道場のカリキュラムの目玉は子どもたちがも式衆として参加する「子ども法要」でした。そして話し合いの結果、その目的が「先祖供養」に設定されたことで、ある問題が発生しました。子ども修養道場一日目の午前中に実施する法話を筆者が環境問題教育のために占有されることで、子ども法要で読む御遺文の説明をする時間や、先祖供養の大切さを説く時間が失われてしまうのです。「今年度の法話はあきらめた方がいいだろうか？」との考えが一瞬頭をよぎりましたが、筆者はそれを最後まで自分から言い出さないという形で、我を通してしまいました。その結果、御遺文の説明も、先祖供養の大切さもすべて法話の中に盛り込むという条件で法話をさせてもらうことになったのです。「出来ます！」と言い切れるほどの自信はありませんでした。そして大変残念なことに、実際自分で予想していた以上に「出来なかった」のです。

四、結果報告

字数の都合上、筆者が実際にどのような法話をしたかという詳細は省きます。大きく分けて次のような三つのテーマで話をしました。

- ① マイクロプラスチック問題についての説明
- ② マイロ・クレス君の紹介
- ③ 『立正安国論』「汝早く信仰の寸心を改めて…」の解説

①②に関しては例会発表と同じ内容を、写真や解説図を見せながら子どもでもわかるやさしい言葉で話しました。新たに加わったのは③『立正安国論』の解説です。実際の法要では原文のまま読んだのですが、法話の中では、筆者なりにやさしい言葉に言い換えて子どもたちに解説しました。ここに記載するのは大変恐縮ではありますが、その全文は次のようなものです。

『立正安国論』

「汝早く信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり、仏国其れ衰へんや。十方は悉く宝土なり、宝土何ぞ壊れんや。国に衰微無く土に破壊無くんば身は是安全にして、心は是禪定ならん。此の詞此の言信すべく崇むべし」

『このせかいをほとけさまのくのように

すばらしいせかいにする方法』

「いますぐにここをいれかえて、

ほとけさまのほんとうのおしえをしんじてください。

そうすればこのせかいは

ほとけさまのくのようにすばらしいせかいになります。

みんながゆたかになって、ちきゅうはずっときれいです。

そうすればせかいじゅうのみんなは、

こわいおもいをしないで、おだやかにくらせます。

どうかこのことばをしんじて、

たいせつにまもってください。」

さて、今年七月二十九日から三十日にかけて、小学一年生から六年生まで計三十九人の参加者を迎え、ついに子ども修養道場が開催されました。実際に三十分間の法話をしてみた結果は大失敗に終わってしまいました。子どもたちが環境問題に興味を示さなかったからではありません。むしろ熱心に耳を傾け、一生懸命学ぼうとしてくれました。しかしそれは前半の十五分間だけです。マイロ君の話の途中から雲行きが怪しくなり始めました。そしていよいよ『立正安国論』、そして先祖供養の話にさしかかろうというところで、ある子どもがトイレに行きたいと言い出しました。その子に許可を出すと、なんと五、六人の子どもが一斉に「僕も」「私も」と手を上げ始めたのです。明らかに集中力が切れていました。そしてこのことに動揺した筆者は法話の着地点を完全に見失ってしまい、子ども相手にグ

ダグダと独り言のような話を繰り返すという最悪の事態に陥ってしまったのです。そもそも環境問題を語るときには、どちらかといえば過去の行いの「ツケ」として現在の状況を見ることになりますから、先祖供養の意義を説くには不向きな話題でした。最終的には、「みんなできれいな海を守って、未来の子どもたちに感謝されるような良いご先祖様になろうね」というところに落ち着きましたが、これでは先祖供養の大切さを説いたことにはならないでしょう。

結局のところ、子どもに三十分間法話を聞かせるという計画自体が無謀だったのです。また、筆者の準備不足により話の流れがスムーズでなかったことも、子どもを飽きさせてしまった大きな要因となりました。実のところ、自分がやりたい環境問題にからめて『立正安国論』の解説や先祖供養の大切さを説く、というミッションを筆者が消化しきれないまま、当日を迎えてしまっていたのです。子どもたちの頭には結局何も残らなかったのではないかとすら思います。自分のエゴによって子どもたちの貴重な修行の時間を奪ってしまう結果となりました。

もし今からあの日の法話をやり直せるならば、迷いなくマイロ君の話だけをするでしょう。実際子どもたちの食いつきもよかったです。時間はもちろん十五分です。残りの十五分は、気分を変えるために他の青年会員に担当してもらい、先祖供養の意義と御遺文の解説を改めて話してもらったり、お経の練習をするのも良いでしょう。子どもたちも飽きずに学ぶことができるだろうと思います。しかし、今年の子どもも修養道場は終わってしまいました。過ぎてしまった時間を取り戻すことはできません。

五、よかったこと

法話は大失敗に終わりましたが、何も良いことがなかったわけではありません。というのも、海洋プラスチック問題について学校で教わったという子どもがほとんどいなかったのです。何人かの高学年の子どもがニュースで見知っている程度でした。以上のことから、海洋プラスチック問題の紹介をできるだけでもやる意味はあったと思います。

また、青年会員側に面倒を強いるだけかと予想していたプラスチックゴミ削減計画の方は、思いのほかメリットも多く、来年度も継続しようという運びになったのは意外なことでした。計画内容は非常にシンプルで、ペットボトル入りのスポーツ飲料を配るかわりに子どもたちに水筒を持参させ、会場にて適宜麦茶を補充するというものです。大きなジャグと水、麦茶パックがあれば簡単に実施できます。最近の水で薄めるだけの希釈用濃縮麦茶も売られているので、より手軽に麦茶を作れるようになりました。なにより重いペットボトル入りの大きな段ボールを運ばなくて済みますし、大量の空ペットボトルの置き場に困ることもなくなります。コストもかなり削減されました。

また、一日目の昼食は流しそうめんを実施したのですが、例年であれば紙コップがプラスチック製のお碗を使うところを、会場寺院のご厚意で木製のお碗を借りることができました。ゴミがでないのはもちろんのこと、昔ながらの木でできた食器を使うことは、食育にもよいと感じました。この方針も来年度に引き継がれ、会場寺院のお膳と食器を借りて一汁三菜をいただく機会を設けようかという話も持ち上がっています。

水筒持参にしても食器を借りることにしても、唯一のデメリットをあげるとすれば「洗う手間がかかる」の一点のみです。しかしこれも子どもたちが洗うようカリキュラムを組むなどいくらでも活かしようはあります。実際今年度の子どもも修養道場では、スタッフが担当するはずだった就寝前の水筒の洗浄を、一部の子どもたちが率先して自分でやっていました。おそらく自宅でも自分で洗っているでしょう。それも自分の分だけを洗うのではなく、何人かで仕事を分担して、協力しあっていました。洗うのは面倒と思い込んでいた自分が恥ずかしくなるほど自然に行動する子どもたちに、逆に教えられた瞬間でした。

六、おわりに

そもそも子ども修養道場でプラスチックゴミに関する法話をしようと筆者に決意させたのは、マイロ・クレス君の

展開した運動と提言との出会いにはかなりません。筆者はかつて法華經提婆達多品における龍女成仏の研究をしていたのですが、マイロ君の存在を知った時、すぐにあの智積菩薩の疑難を想起しました。

智積菩薩言。我見釈迦如来。於無量劫。難行苦行。積功累徳。(中略) 然後乃得。成菩提道。不信此女。於須臾頃。便成正覺。(大正九、三五中)

智積菩薩の言わく、我釈迦如来を見たてまつれば、無量劫に於て難行苦行し功を積み徳を累ねて(中略) 然して後に乃ち菩提の道を成ずることを得たまえり。信ぜじ、此の女の須臾の頃に於て便ち正覺を成ずることを。

龍女の成仏に於いてはともすれば女人成仏という側面ばかりが取り上げられがちですが、彼女が八歳の子でもであり、しかも法華經の教えを聞いてからほんの短い時間で悟りを得たということは非常に重要な点であり、前述の智積菩薩の疑難を見ても明らかです。

マイロ君のように、生まれて十年にも満たない子どもであっても自分のできる範囲で地球環境に対する責任を果たそうとする者もあれば、大人になってもそのような当事者意識に目覚めない者もいます。その行動力や問題意識は年齢によるのではなく、人によるのです。

しかし子ども修養道場での法話が近づくにつれ、筆者はこの気づきによって得た感動を忘れてしまい、いつのまにか「子ども修養道場で子どもたちに環境問題を教え、その結果を教化学研究発表大会で報告する」という実績を求めてしまっていました。環境問題そのものに対してはそこまでの熱い思いがなかったために、その穴を埋めるかのように先祖供養の意義や御遺文の解説などを盛り込んだ結果、何をいいたいのかわからない法話をしてしまいました。いかに正しく聞こえる言葉であっても、そこに魂がこもっていなければ誰の心にも響かないということを学ばせていた

だきました。

最後に、筆者の突然のわがままを快く聞き入れ、特に代替案もないまま提案したペットボトル廃止に關しても対処方法を一緒に考えてくださった栃木県日蓮宗青年会の皆さまに心より御礼を申し上げます。